

## 「やる気応援奨学金」レポート

VOL. 95

ワシントンで中東と外交学ぶ  
海外研修やインターンも経験

法学部政治学科四年 岡嶋 美和 (都立武蔵高校)



はじめに

「理論がどのように現実世界で実践されているのかを見たい」。そのような思いを抱きながら、昨年の八月から今年の五月の九カ月間、私は「やる気応援奨学金（長期海外研修部門）」をいただいてワシントンDCにあるアメリカン大学

(以下AU)に留学した。そのような問題意識が生まれたのは、大学で二年間国際政治を勉強したからであった。将来日本に軸を置いて国際関係に携わりたい身として歴史をひも解きながら外交を学ぶにつれ、数々の理論が分析手法として使用されていることを知った。

無政府状態の国際関係を国益と勢力均衡の観点から分析するリアリズム(現実主義)、法律、文化、経済、政治体制などに重きを置くりベラリズム(理想主義)など、時代の潮流に伴い諸理論が生まれ、学者の論争に磨かれて発展してきた。

その中でも私の興味を引いたのが、コンストラクティヴィズム(社会構成主義)であった。国際関係における規範、アイデア、アイデンティティを重視するこのアプローチは、より人間の心理的側面に焦点を当てたものである。「これだけ理論が発展した今日、政策決定者はいかなる心理で理論を用いて

いるのか?」「将来を共にする世界のカウンター・パートは、今どのような視点で諸理論を学んでいるのだろうか?」。そのような疑問が芽生えた途端、私は留学を決意した。

## Washington Semester Program

私の問題意識に何かしらの答えをもらえると期待して選んだ留学先が、AUのWashington Semester Program(以下WSP)である。WSPは全米各州と世界中から一学期(約四カ月)の間首都ワシントンDCに集結し、それぞれのテーマに合わせて週二日のインターンシップと週三日のゼミを提供する

プログラムである。ゼミは主に週一回の講義、及び(または)クラスメートからのプレゼン、そして毎週三〜四人のゲストスピーカーによる講演・質疑応答で構成されている。招かれるスピーカーは、

IMF、世界銀行などの国際機関、大使館や国務省・国防省などの政府機関、議員、シンクタンク、草の根NGOまで、背景はさまざまである。インターンでの実務経験と合わせ、生き生きとした環境で自分の研究したい分野を学べるカリキュラムとなっている。テーマは「アメリカ政治」、「グローバル経済とビジネス」、「国際法と国際機関」、「ジャーナリズム」など、全一〇コースから好きな分野を選択出来ることから、私は秋学期に「中東と世界問題(Middle East & World Affairs) (以下MEA)」、春学期に「外交政策(Foreign Policy) (以下FP)」を選択した。

## 中東と世界問題

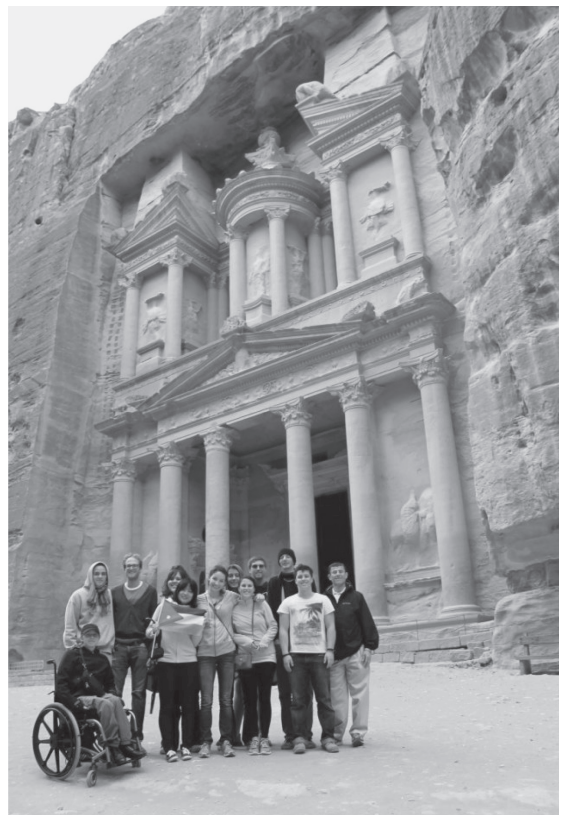
大統領選挙で全米が沸いた二〇一二年後半、「選挙前では政治は内向きになってしまう」と考え、本命であった外交政策は春に回し、最終的に選んだ分野は「中東」であった。中東が日本のエネルギー源として重要な地域であることに加え、国際政治の心理的側面を学びたかった私は、九・一一後の世代であるキリスト教徒のアメリカ人が、どのようにイスラーム世界を学び、理解しているのか垣間見たかったのである。クラス一二人のうち、留学生は二人。敬けんなクリスチャンであるノルウェー人の男の子と、日本人の私である。結論から先にまとめると、「宗教的信念は学問に及んでいなかった」である。わずか一人のクラスメイトを根拠にこの結論が一般化出来るとは思わないが、これが私が四か月間共に過ごしたことによる一つの答えであった。彼らは予想以上に中東に関する理解が深く、客観的でありたいという思いが強かったのである。パレスチナ問題

に關しても、*"If once people learn the history of the Middle East, they will know which is on the right side. People are too ignorant. (一度中東の歴史を勉強すれば、どちらが正しい側かは分かる。人々はただ無知なだけ。)"*という言葉が印象的であった。また、九・一一は彼らにとつて一種の目覚ましであったのであり、より客観的に中東を知るきっかけとなったとも話していた。彼らの世代が今後アメリカの外交政策にどう影響するか、注視していきたいと思う。

### 海外研修旅行

学問と現実の関連を重視するWSPは、幾つかのコースで海外研修を付けている。MEWAもその一つであり、私たちはトルコとヨルダンに三週間滞在することが出来た。当初はトルコの代わりにエジプトであったが、在リビヤ米大使館襲撃事件による情勢の不安という理由で、変更を余儀なくされた。しかし三方月後に私たちが訪問したトルコ米大使館で自爆テロがあったことを考えると、身が

研修旅行中ヨルダン（ペトラ）にて



引き締まる思いである。研修旅行中も、国際政治の渦中にいる方々とお会いする機会をいただいた。トルコでは与党・野党の議員、シ

リア国民評議会、トルコ外務省、EU省、シリア難民キャンプの方々。またヨルダンではムスリム同胞団などの野党、シリア大使館、ノルウェー大使館、パレスチナ難民キャンプに伺わせていただいた。これまで学んできた、ニュースで見えてきた光景が目前に存在し、最前線で活躍されている方から話を聞いたことは、今振り返ると恐

らく二度とない貴重な機会であった。

### ヨルダン大使館

WSPのもう一つの売りであるインターンシップは、学生自身が英語で履歴書を書き、面接を経て獲得する。私は幸運にも、在米ヨルダン大使館の広報課でお仕事をいただいた。主な業務はアメリカ主要メディアにおけるヨルダン・中東の情報収集及び報告、ホームページ改訂のための情報収集、大使館アカウントのツイッター、イ

ベントの裏方の手伝いなどさまざまである。大使館初の非アメリカ人というのはいかにプレッシャーで困難もあったが、週二日の一六時間ずっとパソコンの前で英語漬けになり、外交の仕事にじかに携わり、上司と良好な関係を築けたことは、何よりの財産であると感じている。

## 外交政策

朝四時に起床してオバマの就任演説を見届けた一月、外交政策の授業が始まった。授業の形態はM E W Aと同様、主に講義、プレゼンそして貴重なゲストスピーカーとの対話である。扱うテーマも週ごとに替わるようになっており、欧米・米露関係から始まり、インド、中央アジア、中国と、東方へ移っていく。サイバーセキュリティ、水問題といった、国単位ではない重要事項も含まれていた。中身の濃い授業の中で私が一番良い経験であったと言えることは、中国系カナダ人で行った尖閣諸島に関するプレゼンであった。私たちは、それぞれ自国（出生国）の

立場を調べ、相手に説明し、発表時に互いの見解（原稿）を交換することにした。尖閣諸島は議論を呼ぶテーマではあるが、少なくとも私がプレゼンとクラスとの討論で実感したことは、自国の立場を一边倒で押し通せないという現実であった。詳しい理由は誌面の字数制限上割愛させていただくが、日米中の国内・国外、ひいては世界全体への影響をかんがみると、非常に敏感な外交案件であると改

めて実感したのである。

## 日米協会

春学期に私がインターンをさせていただいたのは、ワシントンDC日米協会である。大使館レベルで外交を見た次は、草の根レベルで日米外交に携わりたいと考えて、教育的・文化的アプローチで両国の友好関係を発展させることを目的とするこの非営利組織に申し込んだ。日米協会では、日本語教室

の開講のほか、五三年の伝統を誇る桜祭り、高校生のための全米日本語大会、小学校・図書館訪問プログラム（Japan-in-a-Suitcase）を運営している。私が担当したプログラムは、文字通り日本の文化を紹介出来る物（ランドセル、浴衣、折り紙など）をスーツケースに詰め込み、日本文化の理解促進を目的とする。インターンはプログラムの広報、クライアントとの調整、プレゼンの内容まで裁量する。任される分責任を伴うが、プログラムを単なるボランティア精神で担うのではなく、一つの商品として捉え、Plan Do Check Actionのサイクルを繰り返したことは経営の勉強になった。また、伝統ある桜祭りに主催者側として参加し、人々に直接日本文化を広報出来たことはこの上ない喜びである。

## 座論

課外活動の一環として、私はAUにある日本人学生のためのキャリア形成支援を目的とした団体、「座論」に所属した。座論では主にDCに滞在されている日本人の



日米友好の象徴である一〇一周年の桜

社会人の方々や日本に縁のあるアメリカ人の方をお招きして講演会を主催する一方、学生にネットワーキングの機会を提供している。

当初は日本人とのかかわりを躊躇していたが、自身の視野を広げるためにも参加することを決意した。

結果、二学期間で開催した講演会は計一回に上り、学者、商社、IMF・世銀、日中大使館公使に至るまで、さまざまな分野からお呼びすることが出来た。座論を通じて得た企画力・調整力・実行力、及び何うことが出来た貴重なお話は、今後の就職活動とその先社会人になっても生かされると強く感じている。

### 自分なりの答え

WSPは期待通り、机での勉強のみならず、学問が生まれ、生かされている現実世界への接点を提供してくれた。さまざまな視点からアメリカ外交を学び、前期の中間コースと合わせて導き出した、当初の問題意識（理論がどのような現実世界で実践されているのか）の私なりの答えは「各自、自

己利害のために用いている」である。高等教育を受けてどんなに国際政治に精通している人でも、自分の意見・利害に都合の良い物語を引用しており、また、自分の都合に合わせているのだと自覚しているても、やはり自分の正統性やアイデンティ

イのためにそうせざるを得ないと感じていくようであった。政治という場においては当たり前のようにこの答えが、自分の今後にどのような生かせるのかはまだ明らかでないが、少なくとも相手の思考回路、及び魂胆を把握することの重要性は身をもって体感出来た。

### 留学を終えて

DCで過ごした九カ月間は、毎日が刺激的で、生き生きとしていた。前期はドイツ人とフランス人のルームメイトと過ごしながら中東の世界に浸り、後期はアメリカ



ドイツ人のルームメイトとリンカーン・メモリアルにて

人と韓国人と再び一部屋で寝泊まりし、多角的にアメリカ外交を学んだ。毎週シンクタンクのイベントに足を運び、無料のスミソニアン博物館・美術館、政府機関、国際機関、アメリカの歴史的な観光名所を堪能する。今振り返ってみると、まるで夢のような毎日であった。他方では自分の小学校レベルの英語、常に受動的で物事を批判的に捉えられない姿勢、自己管理が出来ない弱さに情けなく、悔しくなる場面も何度もあった。しかしそれも踏まえて、活気に満ちた学習環境、出会えた人々、体感出来た場面は一生モノであると確信している。留学を終えた今、このような機会を頂戴出来たことに感謝すると同時に、かならずこの経験を生かそうと新たなやる気が芽生えてきた。共に過ごした友人とまたいつか再会することを約束し、次回は職を持ってワシントンDCに帰りたいと思う。留学前・留学中お世話になったすべての皆様、この誌面をお借りして御礼申し上げます。